

第Ⅶ章 結 語

昭和39年から同61年にかけて行われた薬師寺発掘調査団および奈良国立文化財研究所の発掘調査によって、金堂・西塔・中門・回廊・僧房など、薬師寺伽藍の大要が明らかとなった。回廊・講堂・食堂・南大門はまだ一部の調査にとどまり、外郭施設・僧房・東院・西院、さらに多くの付属的施設などについては今後に期すところが少ないが、平城京の寺院の中で、発掘調査によって伽藍の様相がこれほど解明された寺院はほかにない。また、この成果によって薬師寺が進めている伽藍の復興の基本的な資料が得られ、復興に当り遺構の保存に特別の配慮が払われている。ここでは奈良国立文化財研究所調査を中心として成果の要点を述べたが、いまだ解明されず、あるいは疑問点として残った課題についてもふれることとした。なお、西院・東院の一部についても薬師寺発掘調査団の調査があるが、今回の報告ではふれなかった。

薬師寺の回廊が金堂・東西両塔を取囲むことは従前から想定されていたが、発掘調査によって回廊は講堂側面中央に取付き、金堂には軒廊がないことが確定した。講堂の北に食堂があり、食堂両脇に東西僧房が建つ。東僧房東端には南に向う東南僧房が推定され、食堂を中心として三面僧房の形をとる。食堂の後方では十字廊が確認され、さらにその後方には食堂関係と考えられる掘立柱建物がある。

伽藍中軸線は西二坊大路から1町東の小路心にあるが、南大門・中門・金堂・講堂・十字廊等の心を引通すと国土方眼方位に対して、 $0^{\circ}34'00''$ 北で西へ振れ、現在考えられている平城京条坊南北方向の方位の振れ $0^{\circ}15'41''$ と差はあるが、ほぼ同じ傾向である。

金堂・西塔・講堂・中門・南大門・食堂・経楼・鐘楼は切石積の基壇を備える。僧房は低く玉石の雨葛石を置く程度のものである。講堂は旧基壇上に桁行長さは狭くなっているが現在も講堂が建つので基壇と礎石据付痕の各一部を検出したにとどまり、食堂についても同様である。

現在の地表は旧地表より伽藍全域にわたり約110cmほど高くなり、旧基壇の地覆石等は地下深く発見される。東僧房・西面回廊では後世の攪乱が甚しかったが、遺構の保存状況は良好であったものが多い。

薬師寺は造営後、平安時代になって天禄4年(973)2月27日、十字廊から出火し、金堂・東西両塔は奇跡的に残ったものの伽藍のほとんどを焼失した。その後、長年月の努力によってほぼ焼失前の状況に復興したらしく、長和4年(1015)に『薬師寺縁起』が編纂され、縁起や寺地、各主要建物の状況、復興の経過等が詳しく記されている。南大門や中門の発掘調査の際に遺構から判明する規模が『縁起』の記載と合わないことが指摘されているほか、回廊の柱間数でもその記録と異なる結果を得た。

金堂は昭和46から同51年にかけて復興された。復興前には現在興福寺講堂として改造移築された旧仮金堂が旧礎石の上に建っていて、当初の基壇の保存状況は特に良好であった。桁行7間、梁行4間で、桁行中央3間天平尺12.5尺、両脇各2間と梁行4間は各10尺、裳階の出6.25

尺で、周囲庇側柱には転びがついて足元では10.15尺であった。堂内は凝灰岩切石を布敷とし、身舎中央後方に東西 10.07 m、南北 3.25 m の須弥壇を構える。須弥壇は昭和27年から33年にかけての本尊薬師如来坐像及び脇侍日光月光像の修理の際に大半の部材を取替えているが、須弥壇内部は敷石の上に凝灰岩の角材を並べ、大理石切石で外装している。基壇は東西 29.40 m (99.3尺) 南北 18.26 m (61.7尺) で、高さは葛石まで約 1.51 m (5.1尺) と推定され、凝灰岩切石の壇正積とするが束はなく、正面は中央間と1間おいた各脇間の三ヶ所、側面・背面にも中央間に石階が付く。その後の改修で旧基壇の前に花崗岩製の基壇を積み、寛保1年(1741)には正面に五間の向拝基壇を設けて旧基壇を包み込んだ。このため旧地覆石・羽目石の保存は良好であった。二重、各重裳階付であったことは、『縁起』に「二重二閣」と記すことによつて明かである。

西塔は心礎が旧位置にあり、他に移動した四天柱礎石が2個残っていた。他の柱位置も礎石据付痕があり、東塔と同規模であったことが確認されたが、裳階礎石の据付痕はすでに失われていた。基壇は束のない壇正積で、地覆石のみ花崗岩、その他は凝灰岩とし、四面中央に石階を設け、雨落溝と葛石の間を玉石敷とし、雨落溝の外にも玉石敷が広がる。基壇は一辺 13.65 m (46尺)、高さは約 1.38 m (4.7尺) ほどである。西塔は享禄1年(1528)に焼失し、その後は再建されず、万治3年(1660)に文殊堂が旧基壇上に移建されていたが、昭和8年再び他へ移築されていた。

南大門は昭和29年の調査でその規模を確認し、中央柱筋の調査によつて慶安3年(1650)に移建された現南門の親柱礎石は旧南大門礎石の一部を欠いてそのまま使用されており、据え替えた形跡がないことが判明した。他に10個所の礎石下根石を確認した。また、基壇外東北方では隅木蓋瓦をふくむ多量の瓦の出土があった。基壇は東西 33.62 m (113.5尺)、南北 18.04 m (61尺) で、高さは約 1.48 m (5尺) と推定でき、建物は桁行5間、梁行2間、桁行中央3間各18尺、同両端間及び梁行各間16尺である。天禄火災後再建され、文安2年(1445)に廃絶した。

中門も昭和29年に調査が行われているが、中門復興計画にともない、改めて全面的に調査を行った。中門は桁行5間、各間15尺、梁行2間、各間12.5尺で梁間が狭く細長い建物である。壇正積形式の基壇であるが、地覆と羽目を一石から造り出す。西端部は後世の池のため破壊されていたが、基壇は東西 27.33 m (92.33尺)、南北 13.32 m (45尺)、高さは約 0.8 m で、中央3間に石階を設け、南大門との間に凝灰岩切石を並べた参道があった。『縁起』には、中門に「二王像并夜叉形、^(天)矢及座鬼形等合十六躰」が安置されていたことを記すが、前面両端間に二王像の足柄と考えられる丸柄穴をほった石が2個ずつ、基壇表面より約 20 cm 下に据えられ、背面と妻側の壁際に折曲って石造仏壇を設けた痕跡が発見されている。また、基壇築造に当り、礎石下に特に多量の瓦片を敷込んでいたのも珍しい手法である。

回廊は薬師寺発掘調査団の部分的調査の後、当研究所が西北隅を除く三隅などを調査している。西面では後世攪乱の甚しい部分がある。回廊は当初梁間1間の単廊として計画し、据石を据えるところまで進めながら複廊に変更して完成していることは特に重要な所見であった。興福寺・大安寺をはじめ平城京の大寺の回廊は複廊であったが、薬師寺ではじめ単廊として建設を始めたことは、藤原京の本薬師寺は単廊であったことを強く推察させる。

回廊は『縁起』に「東面廿四間西面廿五間」とするが、東面の調査結果では内側柱列で25間

第七章 結 語

と考えられ、東西面で同じ柱間となる。『縁起』に東西面を異なるとするのはどのようなわけか、単に誤記であるのか明らかでない。回廊はまだ全面的には調査を行っていないので、今後に期するところも少ない。

講堂基壇は東西 42.5m (143.5尺)、南北 22.2m (75尺) ほどで、『縁起』には「重閣七間四間シヤウツツ在裳階」と記され、一重裳階付きと考えられている。薬師寺発掘調査団の部分的調査にとどまり、礎石据付痕は東面 2 個所で確認されているだけであるが、主屋桁行 9 間、梁行 4 間で、桁行中央 5 間各 15 尺、両脇 2 間各 12.5 尺、梁間中央 2 間各 15 尺、両端間 12.5 尺、裳階の出は 6.25 尺と推定すると都合が良い。天禄火災後再建されたが、享禄 1 年 (1528) の兵火によって焼失した。弘化 5 年 (1848) から安政 3 年 (1856) にかけて再建された講堂が、旧位置を踏襲して現存している。

食堂は薬師寺発掘調査団と当研究所が部分的調査を行っている。『縁起』に「九間四面東屋」とし、基壇は低い壇正積の外装で、東西 47.4m (160尺)、南北 21.8m (74尺)、高さ約 0.8m ほどである。食堂も部分的調査で、礎石据付痕は西面 5 個所で確認しただけである。従って柱間寸法も明確ではないが、桁行総長 140 尺、梁間総長 54 尺ほどである。

食堂両脇に棟通りを合わせて僧房が建つ。西僧房は特に保存良好で、天禄火災後、東西僧房は再建されなかったと認められる。僧房の基壇はごく低く、内部は土間で、大房の柱配置、房の割付け、間仕切、床・柵うかの設置状況等が詳しく判明するとともに、後方に小子房が並び、中間に各房ごとに付属屋と中庭があり、大房と小子房と付属屋が一对となって房ごとに僧侶の集団に使用されていた状況が明らかになった。床面から多くの遺物が焼失時の状況ほぼそのままに発見された点も特記される。

東僧房は西端部を除いて全体的に後世の攪乱が著しかったが、薬師寺発掘調査団の調査の際に東僧房東端で基壇が入隅となって南へ廻り、さらに約 63m 南では南東隅の出隅が発見されていて、ここに南北棟の東南僧房が建つことがわかり、東・西・東南・西南の 4 僧房で三面僧房を形成していたことが知られた。『縁起』によると、僧房は旧流記帳では 8 条、うち 4 条は大坊とし、後に 14 字(列) 6 烈となったとする。14 字のうちには檜皮葺坊 2 棟を含み、12 字が大房と小子房各 2 字で 6 列となっていて、檜皮葺坊 2 棟は、東北僧坊・西南僧坊の列に属したと推察される。6 列のうち 2 列の僧房の所在は明らかでないが、東僧房北方にある小柱列群のうちに南北棟の付属屋にあてられるものがあり、東西僧房の北に並んで同じ構成になる東北・西北僧房が推定されるが、なお、今後の調査による確認が必要である。

経楼・鐘楼は通常は講堂の前方東西に予想されるので、薬師寺発掘調査団がまず回廊内で探したが発見されず、北面回廊の外、東僧房との間で、南北にやや長い大きい基壇跡を確認して楼の所在が判明した。西方では西僧房の調査の際に西の楼跡を確認した。基壇は南北 19.25m (65尺)、東西 15.68m (53尺) あり、礎石据付痕は東楼・西楼とも確認出来ないが、東の楼では南面、西の楼では西面と北面に石階を検出し、4 面に石階を備えることが判明した。これも他に調査例のない貴重な発見であったが、建物規模は『縁起』に「長三丈七尺、広二丈五尺」とあり、西の楼の西面石階耳石心々 12.5 尺が中央間の柱間寸法に当り、桁行 3 間、梁行 2 間各 12.5 尺間と推定された。大安寺・興福寺に匹敵する大規模な楼であり、もし興福寺にならえば東を経楼、西を鐘楼と想定される。

『縁起』によれば十字廊があり、食殿とも呼ばれていたので食堂北方と推定されていた。十字廊は薬師寺独特の建物であるが、食堂のすぐ北方で予想通り十字廊を確認した。中軸線上に梁行1間、桁行4間の南北棟があり、その第3間から東西に桁行5間の東西棟が東西に延びて十字形になる特殊な構成である。天禄火災の火元となった建物であり、『縁起』には再興したと記すけれども、再建されたと認められる形跡はなかった。

その他、食堂北方にも掘立柱建物群があり、食堂に関連する諸施設と考えられるが、詳細は明らかでない。伽藍北方では、六条条間路の南側溝に相当する寺域内道路の溝や、右京六条二坊の七・十坪を分ける坪境小路の東側溝に相当する可能性のある南北溝が検出されていて、寺域内の各院は条坊区画に合わせて境内道路で区切られていたことが推察される。

先に記したように薬師寺では造営中に単廊から複廊に変更しているが、他にも造営の経過に関する重要な発見があった。それは、東僧房北方の井戸、SE037から発見された木簡に靈龜2年(716)の紀年銘木簡があったことである。この井戸は木簡とともに木屑や土器が伴出し、当時すでに薬師寺の造営が進められていたことがわかり、従来考えられていた薬師寺移建年代の養老2年(718)以前にすでに造営は着手されていたことになる。『縁起』には養老2年、元明太上天皇が薬師寺の伽藍を平城京右京六条に移すとあり、この伝えが正しいものとするれば、むしろ造営の中で何らかの重要な事業を意味することとなる。

双塔式の伽藍は新羅に多くの事例が残るので、近年とくにわが国と新羅文化の関係が強調されている。本報告では薬師寺金堂・塔・回廊の関係が、新羅の感恩寺と近似した比例をもつことを指摘した。規模は薬師寺の方がかなり大きく、伽藍の構成や個々の建物にも異なるところがあり、今後はわが国の古代の伽藍配置、建物の構造技法などの建築技術の変化発展に、東アジアとの交流・影響を一層重視しながら調査研究を進める必要性を示すものである。

発見物も多量の瓦を中心に種類も量も多い。軒瓦では本薬師寺と同範の軒丸瓦・軒平瓦が特に多い。軒平瓦は五条市牧代で焼成されたものと範傷まで一致し、一たん本薬師寺へ運ばれたものが大部分さらに平城京薬師寺へ運搬されたと考えられる。軒丸瓦は范型の新しいうちに焼成された瓦は両寺から出土する。ただし、同範でありながら范型のやや磨滅したもの、さらに全体が強く磨滅したものが本薬師寺で実際に使われていたかどうか、なお今後の研究課題である。最も出土の多い6276A・6641Gには同じ瓦范型を使用して平城薬師寺のために新しく焼成されたもの含まれる可能性もあるが、現時点ではこの種の瓦は本薬師寺から運ばれたものと考えている。なお、本薬師寺の瓦と藤原京の瓦は共通点が多いが、本薬師寺の瓦の文様が一層精緻であり、製作開始も早いものと考察した。

平安時代の瓦では、西僧房間仕切に使用されていた軒平瓦239は天禄以前の瓦であることが明らかとなり、また、天禄再建に最も多く用いられたのは軒丸瓦39と軒平瓦245であった。さらに、伊予真導庵寺と同範の軒平瓦253は天禄復興時に伊予が東南僧房を割当てられたこととの関連が考えられる。その他平安時代の瓦は興福寺・平等院・六勝寺などと同範あるいは類似するものが多く、それらと比較研究して編年を行った。

古代末から鎌倉・室町時代の瓦も多いが、この時代の軒瓦の編年はまだほとんど未着手の分野である。法隆寺・興福寺をはじめ大和諸寺院の瓦と比較検討し、中世軒瓦の大要を明らかにした。今後の中世瓦編年の基礎的な資料となろう。特に二巴文軒丸瓦の多いのは薬師寺の平安

時代末乃至鎌倉時代前期の特色である。

出土土器の中では西僧房出土の土器群が特に注目すべき遺物である。西僧房は天禄4年(973)火災後の再建が行われず、遺物も焼失前に房内に置かれていた状態をよくとどめ、編年資料としてきわめて重要なものである。また霊亀2年の木簡の発見された井戸 SE037 出土をはじめ、井戸・土壙からの一括出土遺物にも奈良時代以来の遺物が少ない。

西僧房では多量の土師器・黒色土器・少量の須恵器・白色土器・鉛釉陶器・灰釉陶器や中国製磁器などが出土した。白色土器と称したものは平安京出土品では無釉陶器と呼ばれる椀と皿からなり、緑釉陶器製作との関係が濃密に認められて、県下では稀有のものである。

鉛釉陶器には奈良時代の優品である完形の二彩鉢をはじめ、三彩多嘴壺、火舎、緑釉椀などがあり、中国製磁器には、唐代から五代の白磁椀、越州窯の水注と青磁椀などがある。東僧房出土土器は西僧房より少ないが、やはり西僧房と同様に編年基準となる。

これらの土器の器種構成のあり方、産地・型式について検討し、平安京などの他の遺跡出土土器とも比較し、10世紀後葉頃を中心とした土器様式の変遷を考察した。さらに、西僧房出土土器及び小金銅仏などから、10世紀後葉の僧房内の生活のあり方を考察し、大房前室は仏間的な用途が考えられ、中室は出土食器の構成から僧侶2人程度の居室で、後室は食器をはじめ物品の格納場所にあてられたことを推定した。

金属製品には金堂の地垂木・飛檐垂木木口の透彫銅製飾金具がある。垂木・尾垂木木口に同種の飾金具を付けたものに法隆寺五重塔があり、同金堂では尾垂木に飾金具を付ける。海龍王寺五重小塔の垂木木口にも飾金具を付けていた。大官大寺に於ても尾垂木木口金具が発見されているが、類例の少い貴重なものである。

金堂跡の発掘調査で一括出土した金属製品・ガラス製品は幡などの荘厳具に用いられたものと考えられる。また、西塔からは多量の塑像断片が出土した。寺蔵の塑像心木・塑像断片とともに、東西西塔に安置された釈迦八相成道像の遺物である。塔の塑像群としては和銅4年(711)の法隆寺五重塔初重の須弥山に安置された塑像があるが、薬師寺塔では初重内部に法隆寺五重塔よりさらに広い仏壇を構えて安置していた。

中門においても二王像台石の柄穴から塑像断片が出土し、中門の二王像や夜叉形などが塑像であったことが推測される。金堂では脱乾漆像の断片が発見された。『縁起』によると薬師三尊像のほかに、2軀の観世音菩薩像と十二神将が安置されていたから、これらの仏像に属するものであろう。西僧房東から第7室の前室では破損した小金銅仏が発見された。

薬師寺に関して今日でも論争的となるのは、遷都にともない、藤原京の本薬師寺から実際にどの程度の仏像が移され、建物が移建されたかと云う移建・非移建、移座・非移座の問題である。平城京の薬師寺の東塔の礎石、西塔の心礎の材質は角閃石黒雲母花崗岩で、本薬師寺金堂、東西両塔の礎石も同質である。これらは奈良盆地東南部に産出し、飛鳥地方で多量に用いられた石材であるが、同質の石材は平城宮に於ても使用されている。金堂・塔の規模、相互の関係は両寺同一であり、軒瓦にも同範同質のものが特に多く発見されたが、現在までの発掘調査に於ては移建の事実が直接確認出来る遺構はない。本薬師寺においては文武2年(698)に造営がほぼ終わった後で、大宝1年(701)に造薬師寺司の機構がかえって充実されており、遷都の計画とともに本薬師寺の造寺官において、平城京薬師寺の資材調達が進められていたかも

しれず、この間の事情の解明も今後の課題として残る。

平城京薬師寺の金堂・塔の規模・配置関係が本薬師寺と同じであることは早くから指摘されている。南大門は推定六条大路心から18.995m、天平尺64尺、南大門・中門心々は26.7m、天平尺90尺である。中門・金堂心々は51.2mで、天平尺172.5尺となる。塔中心線から金堂心は29.2mであるが、本薬師寺では29.57mでいずれも100尺の計画と考えられる。東西両塔心々は71.71m、天平尺では242.5尺となり、金堂・講堂心々は56.5m、天平尺190尺である。回廊は当初計画された単廊では東西心々118.4m、(天平尺400尺)、南北106.9m、(天平尺362.5尺)である。複廊は南面・北面では単廊と棟通りを揃えているが、中軸線から棟通り隅まで南面東回廊は58.48mで、単廊が59.2mであるのに比べてよりやや短か目である。

平城京の薬師寺は奈良時代には寺地の広さが10坊4分の1あって、右京六条二坊のうち10坪、七条二坊のうち4分の1坪を占めたと考えられている。六条二坊の五・六坪の2坪は当初寺域に含まれず、特別の扱いを受けていたようであるが、平安時代にはここも寺域に入って、東西3町、南北4町、計12坊の垣内が構成された。さらに東方秋篠川との間に設けられた宿院、七条二坊の花園を加えると寺地は16町にも及ぶ。

藤原京は都城の条坊制の確認される最初の都で、本薬師寺はその右京八条三坊の比較的宮に近いところに立地する。藤原京における最大の官寺である大官大寺は左京九条四坊の4坪と同十条四坊坪の2坪を合わせた6坪で、薬師寺よりも宮から離れており、薬師寺とほぼ相対する左京八条三坊には伝紀寺跡がある。大官大寺と伝紀寺跡は発掘調査が行われているが、本薬師寺に関しては、西南隅条坊遺構の調査があるだけですべて今後に期せられる。

平城京では右京の薬師寺と大官大寺の由緒を継ぐ左京の大安寺は、いずれも六条大路に南大門を開くが、大安寺ではさらに南に塔院が独立する。東西関係は薬師寺が右京二坊であるのに対し、大安寺は左京四坊で東に寄る。遷都以前からあった可能性のある海龍王寺は宮に近いが、皇后宮と特別の関係を持つ寺院であり、後には西大寺・西隆寺・唐招提寺・菅原寺をはじめ多くの寺が四坊までの左右京内に建てられるが、興福寺・元興寺・紀寺は外京に位置し、左右京の四坊以内には、遷都当時薬師寺・大官大寺以外の大寺は建設されていない。遷都当初はこの両官寺以外は左右京に寺院を建てない原則であったことを意味しているとも思われる。

伽藍中枢部以外の寺域内の調査も数回にわたり行われているが、明確な建物跡はまだ確認されていない。中枢部についても、講堂・食堂・回廊など、今後の調査が望まれる遺構も少ない。伽藍外周の門・築垣・東院・西院・政所などは調査上に制約も多いが、それらの調査が進めば古代における薬師寺の構成とその後の変遷はさらに明らかにすることが出来よう。

薬師寺は天武天皇の勅願によって藤原京に創建された官寺であり、平城遷都とともに平城京にもその由緒を継ぐ寺院が造営された。現存する薬師三尊像、聖観菩薩像や東塔などの極めてすぐれた古代の文化遺産を伝え、平安時代に入っても高い寺格を保った。

発掘調査によって薬師寺伽藍の状況がかなり明確になったことは、古代文化の研究に寄与するところが極めて大きく、伽藍の構成や計画の手法などの比較によって、中国・朝鮮半島との関係の研究なども、一層広く進めることが出来ると思われる。薬師寺の研究については今後に期するところも多いが、伽藍中枢部の現在までの調査の成果を中心として本報告に取りまとめた。